

たのしいたの



顔の見える関係をめざして

筑波大学教授 小林 汎

3月に、附属駒場中・高等学校を定年退職し、「第2の人生」を附属学校教育局で始めました、どうぞ宜しくお願いします。

振り返ってみますと、この大塚の地で学生時代を過ごし、1973年3月に理学部地学科地理学専攻を卒業しました。埼玉県立朝霞高校を振り出しに、都立練馬高校、都立日本橋高校を経て、1980年9月に附属駒場中・高校に着任し、地理の教員として子どもたちに授業を行ってきました。「筑駒」には、教員生活の4分の3、28年間近くの長きに渡って勤めることになりました。そして今、学生時代を過ごしたなつかしい、この大塚のキャンパスに舞い戻ってきたこととなります。

私の仕事は、今年度から始まった大学本部任用の大学教員として、坪田先生とともに附属学校に関わる様々な取り組みをコーディネートしていくことが主な任務です。谷川教育長の「教育長特別補佐」といった役回りです。

私の場合は、来年度から本格実施される教員免許更新制度を筑波大学としてどのように実施して行くか、特に附属学校の魅力を生かした制度設計をすることが第一の仕事です。また、特別支援学校の将来構想と一体化した附属学校11校の将来構想の具体化に関すること、朝永振一郎記念「科学の芽」賞を発展させることや大学との連携や研修に関することなどに取り組みます。

週2日は大学本部に出かける忙しい毎日ですが、朝TX(つくばエクスプレス)に秋葉原から乗るとき、どっと吐き出されてくる通勤客の流れを横目で眺めながら、ゆったりと座って大学に通っています。晴れた日には、途中、筑波山の双子峰がよく見えます。関東平野に屹立しているさまは、深田久弥が「日

本百名山」としたのもうなずける容姿で気に入っています。大学・教育局・附属学校の三者を繋ぐ役割、これも私の仕事の一つです。何なりとお気軽にご相談ください。お互いに「顔の見える関係」になることがとても大切だと考えていますので。



おハツの心で

筑波大学教授 坪田 耕三

22年間、附属小学校に勤務し、この度、附属学校教育局に勤務が変わりました。いつも子どもに囲まれながらの生活でしたので、大人ばかりの環境に若干の戸惑いがあります。

詩集「のはらのうた」で知られる工藤直子さんの「こころはナニで出来ている？」(岩波現代文庫)を読んで、常に前向きに生きようとする「おハツのこころ」に共感し、私も、附属学校の今と将来に、何かしら貢献できればいいかな、と力まずに務めることに決心いたしました。

附属学校の将来構想には次の三つのことが挙げられています。

- ① 教育実践のリーダーシップを目指す「先導的教育拠点」
- ② 教員養成や現職教員研修への貢献を目指す「教師教育拠点」
- ③ 全世界の教育実践研究への貢献を目指す「国際教育拠点」

私は主に「国際教育推進」の仕事に関わらせていただいております。

附属学校の教育が、国内のモデルとしてだけでなく、全世界の教育モデルとして良い発信ができることを望みつつ、皆様と共に何ができるのかを考えて実現していきたいと思っております。ぜひとも、皆様のお知恵を頂戴し、11の附属学校が一緒になって、世界に貢献できる道を切り開いていきたいと思っております。

附属の今

附属桐が丘特別支援学校

附属桐が丘特別支援学校副校長 吉沢祥子

校庭の芝生の上を爽風が吹き渡る季節、新入生もようやく友達や、先生に慣れ、学校での生活が軌道に乗って来たようです。校内では遠足や校外学習、先輩と意見交換する進路懇談会などが次々と行われています。当校は、昭和27年9月、国内最初の肢体不自由施設「整肢療護園」の在園児の教育を

始めたことに端を発し、昭和33年4月に東京教育大学教育学部附属養護学校として正式に開校して以来、今年で創立50周年を迎えました。“桐が丘”という校名は初代校長石三次郎先生の命名によるもので、「丘の上に、だれはばかりことなく、真っ直ぐに成長していく桐のように、すくすくと発展し、我が国における肢体不自由教育の推進

のために、大きく貢献して欲しい。」という願いが込められています。現在は隣接する心身障害児総合医療療育センター内にある整肢療護園から通学してくる児童生徒のためのキャンパス(施設併設学級)と、家庭から通学してくる子ども達のためのキャンパス(本校)の2つがあり、普通教育課程に準じたカリキュラムと、自立活動中心のカリキュラムの2つを中心に、小、中、高等部全校併せて127名(5月1日現在)

の児童生徒が日々の学習活動を展開しています。

当校では、平成18年度から、在籍数の約80%を占める脳性まひ児を中心に、特に脳損傷に起因する認知面の障害の特性に目を向け、子どもたちの学習上の困難を支援する手だて方法の工夫に、全校研究として取り組んできました。さらに今後、我々の専門性の中核をなすものの一つであると考えられる自立活動の指導の視点も踏まえ、学びに苦戦する子どもたちのニーズを充分にくみ取った、確かな充実した学習指導の深化を目指しています。全国の特殊学校が、特別支援学校として様々な機関や専門家等と連携をとりながら、普通学校に在籍する障害を持つ子どもたちへの適切な教育の助力、助言を求められる中、国立では唯一の肢体不自由教育を専門領域とする特別支援学校として、当校の取り組みは、桐が丘の子どもたち一人ひとりの学びに寄り添いながら、また通常学級に在籍する多様な教育的ニーズのある児童生徒の指導

のよりどころの一助となることを目指したものであり、特別支援教育に多に貢献するところとなるでしょう。



平成19年度附属学校研究発表会

附属学校教育局 田中輝美

平成20年2月23日(土)に「今問われる教師の力-附属学校の実践から-」と題する附属学校研究発表会が開催された。前半には、筑波大学附属学校において実施された研究が発表された。まずは「4校研(附属小学校、附属中学校、附属高等学校、大学の教員が連携した研究会)」から、小学生、中学生、高校生合同の家庭科授業における研究が報告された。各学習段階を考慮して開発された授業内容の紹介と、子どもたちの取り組みの様子が視聴覚資料を交えて生き活きと報告された。この研究を通して、異年齢集団における学びの長所や、学習成果を引き出す関係づくりの在り方などが論じられた。次に、ICT(情報コミュニケーション技術)をめぐる教育実践が報告された。最新のツールを介して特別支援学校の子どもの新しい可能性が引き出された実践例や、大学の授業への参



平成19年度附属学校教育局春期研修会の概要

附属学校教育局 西川公司

平成20年3月27日(木)午後1時~5時15分、筑波大学東京キャンパスG501教室で、筑波大学附属学校教育局主催の春期研修会が開催され、約130名が参加しました。

研修会は、

- ① 講演(1)「協働する授業と学校づくり」秋田喜代美(東京大学大学院教育学研究科教授)、
- ② 筑波大学附属高等学校オーケストラ部の演奏、
- ③ 講演(2)「特別支援教育の現状と課題-高等学校における支援を中心に-」菅野和恵(筑波大学大学院人間総合科学研究科講師)の3部構成で行われました。

秋田氏の講演では、演題として掲げられた「協働する」とことは、他者の視点、異なる人的リソースを持ち寄って学ぶ課程を共有することで理解を深める、自己内対話が生じることが中核であることを強調された上で、協働する学校作りのための授業研究の重要性について実践例を交えながら述べられ、日々の授業作りを行っていく上で非常に参考となる内容でした。

附属高等学校オーケストラ部40名による演奏曲目は、シベリウス作曲交響詩「フィンランディア」作品26(指揮:2年広瀬円香)とワーグナー作曲楽劇「ニュルンベルクのマイスタ

加などを通して一見高校生には難しいと思われる授業内容も可能であること、理系離れが指摘される昨今においても指導のやり方次第で子どもたちは興味を持ってくれる、といった取り組みについて紹介がなされた。後半は、シンポジウム形式で進められた。教師に求められる力について、算数教育や、通常の高等学校における発達障害支援(文部科学省委託事業「高等学校における発達障害支援モデル事業」の実践から)、特別支援学校での指導、といったそれぞれの立場から提言がなされ、教師の力を伸ばすためには様々な経歴の人物の経験から学ぶことが必要、などの指定討論を交えた活発なディスカッションが行われた。

ージンガー」第一幕への前奏曲(指揮:2年金谷沙紀)の2曲で、会場内に重厚な響きがあふれ、参加者はオーケストラの演奏に酔いしれました。

菅野氏の講演では、特別支援教育の重要性と高等学校等における特別支援教育の実態について触れた後、普通附属高等学校では学校ぐるみで特別な支援を必要とする生徒への対応を考える土壌が築かれていることから、今後一層の活動の充実が期待されることが述べられました。

